

4. きらめく動物たちの命と海 【久保田信の白浜だより(その3)】

年末のタイでのフィールド調査 —あわや惨事を目撃者—

2004年12月20日から1週間、タイ国バンコクのチュラロンコン大学とブラパ大学を訪れ、刺胞動物門ヒドロ虫類の系統分類学について共同研究調査などを行った。広島大学の豊潮丸でお世話になっている大塚攻助教授チームの寄生虫類の研究調査に同行させて頂いた。チュラロンコン大学では、ヒドロクラゲのいくつかのサンプルを調べたところ、日本に全く生息しない種類の他、汎世界的な終生プランクトン種も多かった。2003年6月に開催された国際サンゴ学会で報告した日本初記録種が、バンコク付近の川の中流部から、日本で報告例のない種と一緒に採集された。異なる生息域に通常は住みわけている種であっても大きな川では共存が可能なのだろう。

ブラパ大学には水族館や博物館があり、連日、大勢の小中学生や一般団体などが押し寄せていた。両施設を案内して頂いたが、田辺湾で見かける熱帯系の動物が数多く飼育展示されていて親しみを覚えた。例えば、クマドリなどのモンガラカワハギ類や、オニヒトデなど南方系の本場ものが次々と現れる。

カイヤドリヒドラ類の研究調査

分類学研究室で無脊椎動物を専門にしているトンさん(Sumaitt Putchakarn)、カワさん、ティクさん(Kitithorn Sanpanich)、スチャさん(Sucha Munkongsomboon)、そして底生動物学が専門で理学部長のカシンさん(Pichai Sonchaeng)にお世話になった。あちらこちらのフィールドを案内して頂き、自然養殖で市場に出回っているミドリイガイやカキの1種をはじめとして、ハイガイ、タイワンハマグリなどの二枚貝類を購入した。1個体ずつ開いてカイヤドリヒドラ類の共生状況を調べた。シャム湾は塩分濃度が低く、水深の浅い場所なので、カイヤドリヒドラ類の生息に適していると期待していた。しかし、どの二枚貝を開けてもさっぱり共生がみられなかった。これとは対照的に寄生性のケンミジンコ類や扁形動物の渦虫類は高頻度の共生がみられた。そのかわり多数の真珠が入っているミドリイガイが発見でき、共著論文とした(Kubota et.al., 2006)。

2004年12月25日には、ブラパ大学から南へ乗用車で1時間ほどのところにある一大リゾート地パタヤへ行った。海岸では多くの外国人がバカンスを楽しんでいた。数km沖合に浮かぶ小さな無人島へモーターボートで行って、スキンドайビングでの調査を半日した。

クシクラゲ類の2種に遭遇できたが、1種はカブトクラゲで、日本をはじめ、世界に広く分布する種だ。もう1種は赤い玉状の斑点を10個ほど袖状突起に縦列させていた。分類形質を詳しく調べなければ分からないが、おそらく日本以外では初記録となるアカホシカブトクラゲと思われる。

ブラパ大学との共同研究

ブラパ大学は広々とした敷地で整備された構内は居心地がよい。宿所も14階の最上で眺めもよく、波静かなシャム湾が毎日眺められた。熱帯系の植物や鳥・爬虫類などとともに深く印象に残った。講演も頼まれ、ベニクラゲを **Die-Hard Medusa** と紹介して不老不死の生活史に驚いて頂けた。

大学と道路を一つ隔てたところに、毎晩たくさんの屋台が真夜中まで立ち並ぶ。そこでの食事は、激辛かと思えばかなり甘い味つけもあった。ヌードルが様々でシーフードがふんだんに食べられる。エビ類の養殖も盛んなので、たっぷりエビが入っているのだ。麺類だけでなく、焼き飯にもたっぷりだった。また、生まれて初めて、虫の油いためも食べたが、結構、香ばしく美味しかった。

市場には数々の魚介類が見られたが、日本では天然記念物になっているカブトガニ類が多数水揚げされていた。カブトガニ3種のうち2種の生殖巣が食べられるとのことだが、料理法が難しく、あたることも多いため味見はしなかった。12月は乾期なので、日によっては肌寒い朝もあり、心配していたカが少なく、過ごしやすかった。

ホスト研究者たちと、カラオケやタイ式マッサージなどでリラックスと親睦もはかれていい思い出となった。ここでもカラオケチャンピオンがまかり通った。温かく親切な人柄であるタイ国研究者にすっかりお世話になった。ほとんどこれまで研究例のないヒドロ虫類なので、今後、生活史解明を含んだ地道な基礎研究を主軸とした系統分類学が育ってくればとの願いをこめて、今後もより一層共同研究を発展させていく予定である。

帰国寸前だったが、マグニチュード9の巨大地震による津波で、タイ南西部のプーケットをはじめインド洋の沿岸一帯に甚大な被害が出たとのニュースが流れた。幸運にも今回の研究はマレー半島にはばまれたシャム湾の北東部だったので、津波が回り込んでこなかった。だが、旅行前は知人のいるプーケットに出かけることも考えていたので、恐怖で身を震わした。もしかすると自分自身が漂着物になっていたかもしれないのだ。12カ国で犠牲者が出ており、2005年1月中旬になって、死者は16万人を超え、常夏の青い空と海が嘘のようである。東南海・南海大地震による津波被害が懸念されている紀伊半島沿岸では、警戒を緩めてはいけなくと改めて思った出来事だった。(つづく)